

これがヨーロッパへ行きますとアメリカの状況とだいぶ違います。電子音楽そのものはヨーロッパで誕生したわけですが、それはロック音楽とかあるいはクラシック音楽を経て、十九世紀、二十世紀と進んできたヨーロッパ音楽の変遷の結果、必然性をもって誕生してきたといえる分野だと思います。今日はその変遷を追っている余裕はありませんけれど、バッハやベートーベンの音楽がどのような変遷を経て今世紀のころに電子音楽に到達したかということは、ヨーロッパ音楽の歴史を追っていけばはっきり分かります。ヨーロッパで、ロックやクラシック音楽と電子音楽というのは、一つの線でつながっているわけです。電子音楽を好まない人はいますけれども、電子音楽をなにか別なものであるという捉え方はヨーロッパの人たちはあまりしていないようです。

それとヨーロッパの人は、ナマの催し物に対する関心が非常に高いということがあると思います。ナマのものが文化だという意識が強いかと思っています。このことは、ヨーロッパへ出掛ける多くの方が体験なさっていると思いますが、どんなにテレビとかレコード、あるいはビデオ、そういうものが発達したり普及しても、やはり彼らにとつての文化というのは、自分の足を使って、夜になると音楽会に出掛けていく、あるいは週末になると美術館や画廊へ行って展覧会を観る。また演劇を観に行く。そういう自分の体を使って行う行為のことで、それはごく自然に、一般市民の日常生活の一環に組み込まれている。それだけナマのものに対する関心が深いといえるかと思っています。

したがって電子音楽にしても大幅な機械化を行うのではなく、むしろヨーロッパの電子音楽は、人間と機械がどうしたら理想的な形で共存が可能かというような意識が常に制作の背景にあったということができると思います。特に電子音楽が誕生してきた一九五〇年代に、優れた作品がヨーロッパでたくさん生まれたわけですが、そのことはやはり技術の問題だけではなくて、新しい音楽の素材に対する根本的な問いかけがあったから可能になったのではないかと思います。

日本では、シンセサイザーがどちらかというと新しい音楽を表現する媒体——楽器の代名詞のようにいわれ、考えられているところがあるように見受けられます。確かにシンセサイザーは、たいへん合理化された装置で、簡単に電子音楽をつくることを可能にしました。その結果、電子音楽を、楽器でいえばギターとかドラムなどと同じように、非常に一般的なものにしたというのは、シンセサイザーの普及に負うところが大きいと思います。ただシンセサイザーが音楽的に何か新しい問題を提起したかということになりますと、これにはいろいろ議論があるかと思えますけれども、シンセサイザーの誕生後は一般的に電子音楽というのはむしろ後退したように私は思えるんですね。これは内容の面からそうだということなのですが……。